



中村俊定文庫  
文庫 18  
49







一冊ハ西氏の主此年此乃  
 書なり是とせりひろ  
 めんあゝ次りふりき  
 さしわひ何ん時節を  
 見むたあの日さとしさる  
 を法神あれと海さしとて  
 竹る丸ハ少年の時連歌乃  
 執筆しと玄旨法中法橋  
 詠巴おの連歌をく仕給  
 一玄捨乃時のさし合志  
 法法をゆつとさしゆり  
 そのふにさししきさめ



ことのふきはさしうこれ候は  
 なしと心ももみかお事  
 多しはあやまりことなしくり  
 ゆきさうん悔とや詠諧の  
 き合はれ漢のごとく  
 けしきを丸く四季は白  
 さりにすまひるるめり  
 り人ありと人をもに  
 たりそれ一概なる物なる  
 難ありはあはれ詠諧の  
 和の方鬼女れをせされ  
 ことと詠諧おとすま  
 文

ともや連歌はあはれみ  
 はし縁とるむくりあはれ  
 和歌にりりあはれ故  
 雪月花のそはぬ四季の  
 白をふくかを詠諧は  
 是にとめりされも連歌  
 のさやうありあはれ  
 にむか月八おせりは道  
 みまんの入雪月を四季  
 乃白種と風流ものには立  
 るるるとあはれあはれ  
 をはれ各あはれ習ひあり



たとへん宗鑑そしん程ま奇きにり  
 まりやは里さとをふふふ郭かく公こう  
 みやこのうにいふふ結むすん  
 といくくとまりなまん  
 行ゆちて山やま渚しづくく一いつ郭かく公こう  
 月つき一いつ程まれれききうう海うみ行ゆきたた  
 あと郭かくちちををててううわわひひ  
 くる古こ奇きと宗鑑そしんがが去さるる  
 ずずややああややううはは後ごくくににまま  
 べべあありり是しををいいくく是し次じ也やも  
 へへてて月つきのの句くああととふふとと月つき  
 乃な文字もじととああるるここ月つき次じのの

月つきよよととももそのその勢せいででれれ月つき  
 ををりりととふふととああるるななりり又また  
 何なにかかいいよよららのの故こにに詠ぎ詠ぎ  
 なるなるははととくくととささははしし連れん袂たもとと  
 ううとといいちちああるるいいをを用もちりり  
 伊い勢せい乃な里さと一いつへへとと次じははきき  
 ぬぬとといいふふにに丸まるくく急いそぐぐ  
 をを不ふ審しんはは殺ころぬぬるるううととああ  
 ののむむせせとといいふふ人ひとわわりりとといいくく  
 此こゝ連れん奇きのの詠ぎ詠ぎ乃な時ときをを  
 たた核かくとといいふふ人ひとをを傳つたへへ  
 ことことよよのの底そこををたたとといいくく



つぎにまねくわうの  
 なる俗態俗言をも去捨  
 て大笑をせられゆりま  
 ちやいやなるもの  
 このむきものちり松身連歌  
 せせぬふ調諧つさ  
 めるすまそゆいざやい  
 みの返一は太はくむの  
 肉ふ多んおの西門とらさ  
 してふとらふ付句とえて  
 合点せし中よと尸とら  
 ゆりきさうあしにぬすを

志まらりかあしりうく  
 口さかたふあ附ふたせと  
 丸り同季の原つらつめ  
 口よそ古人よあせし尸  
 ともやとらりうさひを  
 せらる人もあふりけ法  
 宗祇の独吟の飛踏百約  
 見ゆらよ空まよと皆あひ  
 さりたせしれあうれ  
 けしをぬうさう合れさ  
 ハ僻言あらあしとあふ  
 くもあふれとまらひ



一冊と自己の實<sup>わらう</sup>を<sup>さう</sup>り  
ほのゝあさめく月夜あん  
時のこゆふと思はくとも  
んよらうとて名付くも  
ひしする者也

慶安二年十二月十八日

長久丸

慶安二年庚午

季秋吉辰

寺町通糸福寺前町  
袂田屋平在桑門板



